様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３８０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６６００６１

研究課題名（和文）母親の養育者としての発達に関する研究―「愛着 - 養育バランス」尺度の活用―

研究課題名（英文）Mothers' development as caregivers: use of the Attachment-Caregiving Balance Scale

研究代表者
武田　江里子（Takeda, Eriko）

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：６０４４８８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円、（間接経費）　　870,000円

研究成果の概要（和文）：母親の養育者としての発達過程を明らかにするため「愛着-養育バランス」尺度にて縦断調査を行った。どの時期でも、愛着的因子（母親自身の不安の対処）より養育的因子（子どもの不安への対処）の方が高く、2相性を示した。経産婦は愛着を自分自身へも向ける傾向がみられ、初産婦は産後間もないころは子どもも愛着対象として認識する傾向がみられた。養育的因子は育児経験を通して上昇する傾向がみられた。尺度は短縮版を作成し健診での有用性が確認できた。
　支援のための基礎資料として、看護者と母親に対しての産後の母親のストレスに関する意識調査、及び母親へのグループインタビューから、ストレスの本質を抽出した。

研究成果の概要（英文）：This longitudinal study examined mothers' developmental processes as caregivers, using the Attachment-Caregiving Balance Scale. The scale had been created based on perspectives of the development of caregiving systems to capture mothers' developmental processes as caregivers. At all stages, the caregiving factor (dealing with anxiety over children) was higher than the attachment factor (dealing with mothers' own anxiety), indicating a biphasic pattern. Multiparas tended to show attachment toward themselves, whereas primiparas tended to recognize their children as attachment figures soon after childbirth. Caregiving factors tended to increase throughout mothers' parenting experiences. In addition, a short version of the scale was created, and its utility at a health checkup was noted. To acquire basic data for supportive intervention, surveys and group interviews were conducted with nurses and postpartum mothers about mothers' stresses, and factors of these stresses were extracted.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学　生涯発達看護学

キーワード：愛着　養育　養育者としての発達　子育て支援　不安　ストレス

１．研究開始当初の背景

(1)　子育て支援としては、子どもの成長発達や虐待防止（養育者の不安や不満、育児環境等）の視点が強調されており、母親の発達に応じた支援という視点は低い。現在、行政でも民間でも様々な支援が講じられているが、不適切な養育の代表とも言える子ども虐待は一向に減る気配がない。このような中で、支援の基本的方向がうまくポイントをおさえていないのではないか（汐見：2007）という指摘や、「親育ち」のための支援の重要性について指摘されてきている（大日向：2005、林：2006）。さらに、効果的でない子育て支援の要因として、愛着や養育の質に明確に焦点を当てていないという指摘もあり（Rutterら：1999）、子育て支援の考え方を再考することの必要性が示唆されている。

(2)　「親育ち」への支援、つまり養育者としての発達を促す支援が必要と言えるが、親がどのように養育者として発達していくのかという過程は明確ではない。親が親となることで何が発達するのかという研究（柏木ら：1994、林：2006）や社会的サポートの重要性、育児環境・育児意識等の研究（吉川：2003、花田ら：2006、原田：2008 等）は多いが、その発達過程に関する研究は少ない。母親役割や母性意識に関する研究（新道ら：1994）では、母性意識を形成・発展させながら母親役割を獲得していくことが明らかにされているが、本研究では、さらに母親役割の獲得も含む養育者としての発達過程を明らかにすることで、その発達状況に応じた支援へと結びつくと考えた。

２．研究の目的

(1)　乳幼児期の子どもを持つ母親の養育者としての発達過程を明らかにする。親と子どもの関係性の中で最も重要と言われる「愛着-養育プログラム」（Bowlby：1969, 1982）に焦点をあて、母親が養育者として発達していくことを「養育システム」の発達と捉えた。その構成概念を抽出し尺度化したものが「愛着-養育バランス」尺度（図１参照）であり、信頼性・妥当性は確認済みである。その尺度を用いて発達状況を測定し、発達過程を明らかにする。

「適応」		「敏感性」		「親密性」	
愛着	養育	愛着	養育	愛着	養育
子どもへの依存	役割受容	自分への関心	子どもへの関心と理解	自分に対する支え	子どもへの愛情と支え
母親になったことに自信が持てず、子どもとの関係性が不安定な状態	子どもとの関係性の安定と子どもの成長・発達を考えられること	自分への関心がより強くなっていること	子どもの状態を察知し、欲求を満たしてあげられること	自分への支えや助け、癒しが必要な状態	子どもを愛し支えたいと思うこと
下位項目：5項目	下位項目：5項目	下位項目：5項目	下位項目：5項目	下位項目：5項目	下位項目：5項目

図1　「愛着-養育バランス」尺度の構成概念（6 因子）

(2)　乳幼児健診場面での「愛着-養育バランス」尺度の有用性を確認し、アセスメントツールとしての活用を検討する。さらに、健診場面でより活用しやすくするため短縮版を作成し、信頼性・妥当性および健診場面での有用性を検討する。

(3)　個々の母親の発達状況に応じた支援策を構築するため、母親たちのストレス・不安および求める支援の本質を明らかにする。

３．研究の方法

(1)　母親の養育者としての発達過程を明らかにする。

産後１か月の母親に「愛着-養育バランス」尺度を用いての継続調査（1 か月時、3 か月時、6 か月時、1 年時、18 か月時、2～3 歳時）を依頼し、同意を得られた 234 名を対象とした。時期ごとに郵送し返送していただいた。調査内容はすべての調査時期において「愛着-養育バランス」尺度の他に、その時期のストレス内容とした。時期別には、養育者としての発達に影響すると考えられる因子に関する尺度を追加した。1 か月時は「ストレス対処方略」、3 か月時は「対児感情」、6 か月時は「育児ストレス」、1 年時は「被養育体験」、18 か月時は「内的作業モデル」、2～3 年時は「愛着スタイル」を測定する尺度を調査内容とした。

(2)　「愛着-養育バランス」尺度の乳幼児健診時での有用性を検討し、短縮版の信頼性・妥当性および有用性を確認する。

①3 つの市の乳幼児健診（６か月児相談、１歳６か月児健診）時に来所した母親で同意の得られた 752 名（3 市の合計）を対象に質問紙調査を行い、その結果と健診時の問診票の照らし合せを行った。照らし合させはそれぞれの市の保健師とともに、＜気になる＞ケースの抽出に役立つかと言う視点で検討会を行った。

②１歳６か月児健診に関わる保健師に問診時に尺度を使用してもらい役立ったかを調査した。221 名分の問診についての回答が得られた。

(3)　子育て支援に関する意識を母親と支援者側から調査する。

①母親のストレスの本質を明らかにするため、(1)で調査した母親のストレスの自由記載をテキストマイニングにて分析し、ストレスの結びつきからその本質を抽出した。

②産後 3 か月前後の母親を対象（5 名と 6 名の 2 グループ）に、「これまでのストレスや知っておきたかっこと」についてのグループインタビューを行った。

③１歳６か月児健診を受診した児の母親で、同意が得られかつ健診後の調査も含めて回答のあった 150 名を対象として、健診の満足度および受けたい支援について調査した。

④支援者側として、産後の母親に関わっている看護者で調査同意の得られた 98 名の意

識調査（母親の不安やストレスの捉え方と支援）を行った。

４．研究成果

(1)　産後１か月から１年６か月までの母親の養育者としての発達過程

①「愛着-養育バランス」尺度の変化では、どの時期においても愛着的因子（母親自身の不安の対処）より養育的因子（子どもの不安への対処）の方が高く、2 相性を示した。1 か月時の 6 因子（30 項目）の分布を図 2 に示した。「適応:愛着（子どもへの依存）」は育児経験を積むことで下降し、「敏感性:養育（子どもへの関心と理解）」は上昇していたが、「敏感性:愛着（自分への関心）」は上昇していた。「適応:養育（役割受容）」は有意差はなかったが育児経験を積むことで上昇傾向を示した。「親密性:愛着（自分に対する支え）」「親密性:養育（子どもへの愛情と支え）」は育児経験による変動はほとんどなかった。母親は愛着の対象を夫や家族等の周囲に向けていたが、経産婦は自分自身へも向ける傾向がみられ、初産婦は産後間もないころは子どもも愛着対象として認識する傾向がみられた。

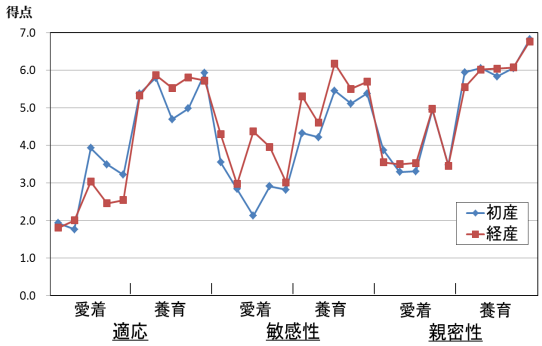

図 2　産後 1 か月の 6 因子 (30 項目) の分布

②影響要因との関連では、ポジティブなストレス対処や子どもへの接近感情、ケア因子の高い被養育体験、安定型の内的作業モデルを持っている母親の方が「愛着的因子」が低く、「養育的因子」が高い傾向がみられたが、全てにおいて有意差がみられたわけではなかった。これらの影響要因も含め、子どもの月齢や初産婦か経産婦かは、養育システムへの影響要因ではあったが強い影響とは言えなかった。安易に初産婦・経産婦とか、子どもの月齢によって養育者としての発達を考えるのではなく、個々の 6 因子の状況から判断することが、有効な支援策に結びつくと考える。

「愛着-養育バランス」尺度は先に述べたように、「適応」「敏感性」「親密性」それぞれの愛着・養育の計 6 因子で構成される。それぞれの因子をみてみると、「適応」は育児経験を積むことで愛着は低下し養育は上昇することが明らかになった。「敏感性」は養育については「適応」と同様の傾向がみられたが、愛着については逆の傾向を示した。「敏感性:愛着」は自分への関心を示しており、多くの母親が同様の傾向を示していることから、子育てに慣れている（慣れていく）ことで自分へも関心を向けられる余裕をもてるという解釈もできる。しかしながら、成果(3)の＜気になる＞母親では、この「敏感性:愛着」が有意に高いことから、「敏感性:愛着」が高いことを一般的な傾向と捉えることは危惧される。「敏感性:愛着」が高い母親には、より具体的に話を聞くなど、子育ての状況を判断する必要がある。「親密性」については大きな変動がみられなかった。これは養育システムへのシフトは思春期から始まっており、妊娠期と産後数か月間で最大限変化する可能性があり、特に「親密性」については思春期や妊娠期にすでに一定の発達をとげていたと考えるのが妥当と言える。そのため育児期での大きな変化はみられなかったと考える。

(2)　「愛着-養育バランス」尺度短縮版（各因子 2 項目の計 12 項目）を作成し信頼性と妥当性を検討した。

対象は乳幼児健診を受診した母親であり、短縮版作成で 1690 名、短縮版の信頼性・妥当性の検討で 716 名であった。短縮版作成は、因子ごとの逸脱点数に対する感度・特異度及び IT 相関の結果から各因子 2 項目ずつ選出した。選出した 12 項目のクロンバックの α 係数は 0.81 であった。尺度点数を健診時の＜気になる＞母親とそれ以外の母親で比較し、6 因子全てで有意差が認められたことより妥当性が確認でき、リスク群の抽出に役立つ可能性が示唆された。

(3)　「愛着-養育バランス」尺度の乳幼児健診での有用性についての保健師との検討会

では、各ケースの概要（問診票の内容）と尺度 6 因子との関連をみていき、表 1 のような傾向がみられるということで、検討したメンバー間で概ね一致した。実際の健診時の問診場面での尺度の活用についての調査では、83.5%の保健師が「役立った」「どちらかと言えば役立った」と回答しており、健診場面での有用性が確認できた。

表 1　＜気になる＞母親の傾向

愛着的因子の高い母親の傾向:
- 母親のペースで生活
- 自分にとっての生活のしやすさに目がいきがち
- 子育てに不安を持っている、自信がない
- 思うように関われない、子育てを楽しめない
- 子育て環境（哺乳瓶、テレビの視聴等）

養育的因子の低い母親の傾向
- 子どもとの関わりが少ない
- 子どもの反応が捉えきれず、関わり方がよくわからない
- 子育て以外の関心事（仕事等）も大きい
- 母親としての役割だけではない

(4)　産後の母親の不安・ストレスの本質：

全体では【今後の心配】【夫の協力がない】

【子どもが寝ない】【子どもの泣き・ぐずり】【家事が大変】【寝不足】【思い通りにいかない】【情報の混乱】【母乳の不足感】【育児が大変】【自分に対するやるせなさ】【自分の時間がない】【自分へのねぎらい】【複数の子育て】の 14 カテゴリーが抽出され、そこに【初産】【経産】というカテゴリーを加え 16 カテゴリーとし、カテゴリー間の結びつきをみた。初産婦・経産婦で同じストレスは多く、その中でも【思い通りにいかない】ストレスは両方に多くみられた。それぞれに特徴的なストレスもあるが、いずれのストレスにおいてもそのストレスのみでなく、他のストレスとの結びつきをみることで、ストレスの本質的なものが察知できると考えられた。

グループインタビューでは、【思っていたことと違う】【自分が悪いと感じる】【保証がほしい】【わかっていてもできない】【周りとの比較】【見通しがたたない】【自分だけ】【みんな同じではないこと】【わかってくれていない】【母乳への強いこだわり】【子どもの泣き・ぐずり】等が抽出された。ストレスや不安の項目としては母乳や子どもが寝ないこと、泣きのことが多くあがってくるが、それによってどのように感じているかで支援は異なってくると考える。例えば、母乳にしては、児の体重が気になっているのか、自分が母親として責められているように感じてつらいのかで支援の方法は異なってくる。

(5)　母親の求める支援では、1 歳 6 か月健診時の調査では図 3 のように、「理由を問わずに、子どもを一時的に預かってくれるサポート」「予約などなくても、受けたいときにいつでも受けられるサポート」や、「遊びの教室など発達に応じた教室」「ささいなことでも気兼ねなく相談できるサポート」を 7～8 割の母親が選んでいた。専門職による家庭訪問は実際に受けた母親を合わせると 7 割強の母親が訪問を望んでいた。それ以外の訪問についても 3 割強の母親が選んでおいたが、母親のニーズとしては他のニーズと比べるとそれほどニーズの高いサポートではなく、初産婦・経産婦での差はほとんどなかった。

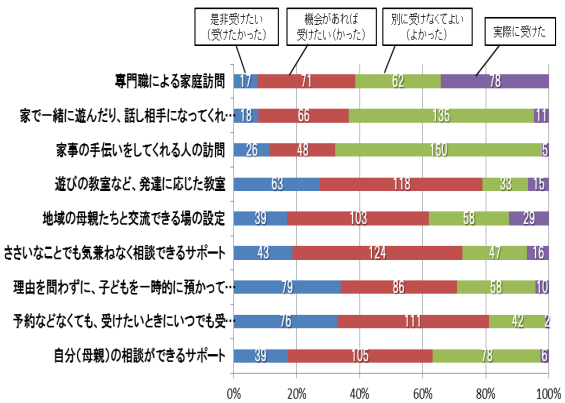

図 3　受けたい（受けたかった）サポート

グループインタビューの中でも「自分を中心に考えてくれる支援は心地よい」という意見があり、同様の傾向がみられた。つまり、自分が欲するときにそく対応してもらえるということを求めていた。

(6)　産後の母親の不安に関する看護者の意識として、初産婦に比べて経産婦に関しては不安が高いという意識や指導が必要という意識を持っている看護者は少なかった。しかし、成果(4)で示したように経産婦でもストレスが多く、また経産婦ならではのストレスがあることから、看護者は対象（初産婦・経産婦）とストレスや不安に関してのずれがないかを確認することが必要と言える。

産後入院中の母親に対して【関わりの際に意識する内容】としては、「泣きに関すること」「自分のペースを大切に」「他家族との調整」「赤ちゃんに合わせた生活」の４因子、経産婦は「上の子との調整」が加わった５因子が抽出された。特に「赤ちゃんに合わせた生活」について意識されており、経産婦についてはさらに「他家族との調整」が意識されていた。【母親の退院後の不安】【指導の必要性】に関する看護者の認識は，関わりの際に意識する内容に影響していた。看護者の属性（職種・経験年数・自身の育児経験等）は経産婦には影響要因となるが，初産婦に関しては影響要因ではなかった。

看護者が関わりの際に意識する内容と対象である母親が求める支援やストレスの本質を見比べると、育児のイメージ作りの大切さは合致する。しかし、そのイメージ通りでないことに対する対象の思いや、そこから生じる様々なストレスに対する支援の場や方法が不足していることが示唆された。また、表出されたストレス内容だけでは、その本質的な支援につながらないことも示唆され、より個々に応じた支援が求められていると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①武田江里子、佐原直美、小林康江、1 歳 6 か月児をもつ母親の育児の楽しさに関連する要因、保健師ジャーナル、査読有、7 月号、2014、掲載決定

② Eriko Takeda、Yasue Kobayashi、The development of a maternal caregiving system: Based on changes in the attachment -caregiving balance scale up to 6-7 months postpartum、Journal of Japan Academy of Midwifery、査読有、27(2)、2013、237-246

③武田江里子、小林康江、弓削美鈴、産後の母親の不安に対する看護者の意識的かかわり：看護者は産後の母親に対して不安に関する何を話しているのか、日本看護研究学会雑誌、査読有、36(4)、2013、11-18

④武田江里子、小林康江、加藤千晶、産後 1 か月の母親のストレスの本質の探索：テキストマイニング分析によるストレス内容の結びつきから、母性衛生、査読有、54(1)、2013、86-92

〔学会発表〕（計８件）

①武田江里子、産後１か月健診時に「知りたかったこと」と【愛着-養育バランス】の変化、第 28 回日本助産学会、2014 年 3 月 22 日、長崎

②武田江里子、「愛着-養育バランス」尺度短縮版の信頼性と妥当性、第 33 回日本看護科学学会、2013 年 12 月 6 日、大阪

③ Eriko Takeda 、 Factors Influencing Happiness toward Childrearing of Mothers with Six- to Eight-Month-Old Babies: A Model-Based Analysis Based on Health Center Intake Interview Sheets、11th International Family Nursing Conference 、 2013 年 6 月 20 日 、 Minnesota,USA

④武田江里子、医療者の認識する産後１か月の母親のストレスと実際のストレスの相違：テキストマイニング分析から、第 32 回日本看護科学学会、2012 年 12 月 1 日、東京

⑤武田江里子、1 歳 6 か月健診での「愛着-養育バランス」尺度の有用性の検討、第 26 回日本助産学会、2012 年 5 月 2 日、札幌

６．研究組織

(1)研究代表者

武田　江里子（TAKEDA, Eriko）
浜松医科大学・医学部・准教授
研究者番号：６０４４８８７６

(2)研究分担者

弓削　美鈴（YUGE, Misuzu）
佐久大学・看護学部・准教授
研究者番号：２０３６９３３

(3)研究連携者

小林　康江（KOBAYASHI, Yasue）
山梨大学・大学院医学工学総合研究部・教授
研究者番号：７０２６４８４３